

姫路市野里 金井利孝氏蔵

観海講堂の 絵図について



編集：亀山雲平顕彰会
発行：長野哲
住所：姫路市木場
前七反町39番地
八家土地興産(株)内
電話：(0792)45-0015
印刷：浜谷印刷株式会社

根対山の門人である。

左図は雲平の高弟で観海講堂の教授兼塾長であった金井利信が、雲

平が没した翌年明治三十三年十月

金井利信の手記

利信の先師に従ふや、頗る久しう

明治十年の春始めて、束脩の礼を行つてより、爾後二十年の長日月

にして、其間懇意なる教訓化育にして、其間懇意なる教訓化育に浴せしこと能く筆舌の盡す所にあらざるなり。後遂に擢んでられて去來したであろう。

そして、現在観海講堂の姿を知る上で唯一の貴重な作品である。

彼のこの心情をよく表した手記がある。

實にたらちねの君にも劣らざるなり。嗚呼此の恩何を以て報ゆるをあらず、思ふて茲に至れば、其恩

姫路永世舎と称して、旧土族授産のための製陶所があった。この泉(旧藩士)は京都南画の師、日

うと考へこの桑原真系に描かせたものである。

利信の先師に従ふや、頗る久しう

このように敬い慕つた雲平先生と、学び舎を忘れ去ることを能わず、思い出深い姿を永久に残そうとして、描かせたたるものである。

貴重な遺品であると共に、この師にして、この門人あり、今更乍ら雲平の心豊かな教へが人間形成の上に根深く、大きな影響を与へ残してゐるのに感動するのである。

この絵図は、金井家に保存されていたもので、姫路市野里の金井利孝氏の御厚意によりここに掲載することとなつた。

深く謝意を表すものである。

(長野哲)

觀海講堂の開講

龜山雲平顯彰会

代表長野哲

一、觀海講堂の名称は

頬山陽の孟子評点より執る

られている。

觀海講堂は、明治十七年十月一日、新築の学舎と塾舎が完成し開講した。

明治六年に開いた書院「久敬舎」は年を追って門人が多くなり、収容しきれなくなり、遂に大きな講舎と寄宿舎が新築されたのである。

開講にあたり多くの文人墨客たちが招待された。その時、新しい学舎の名称が話題になった。

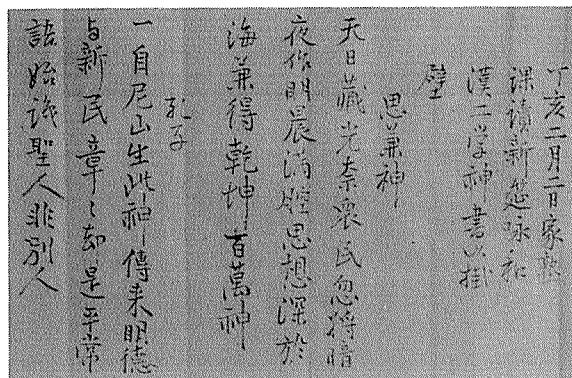
これより先、文化五年五月、二十九歳の頬山陽が「孟子評点」を完成していた。

山陽は前後五回に亘り「寿山鑒を訪れていた。そしてある時の講義にこの「孟子評点」を論じていたのである。この文中

「觀於海者難為水遊於

聖人之門者難為言」

二、開講記念の賦



觀海講堂新成賦以諸子

龜山雲平

講堂元擇勝 粉壁映青松

壯膽南膽海 養心北戶峯

典憤尋理窟 筆硯試詞鋒

憶此經營事 諸君勞幾重

閑に掲げられた。(創刊号参照)

また、講堂の中には、和漢の二神を祭祀して、学神として尊崇し

月山伯敬

節宇先生講堂落成賦以慶之

典經脩練講精術、道徳高風爰發揮

負笈四方門下至、鳴鄉處在比隣依

雙棲鳳鳥園前樹、三集鱣魚堂上扉

この作者月山伯敬は、姫路藩上

席典医であり儒者でもある芹田静

所の子で、芹田昇達である。

成斎重野先生以官事

至姫路賦呈

開左分櫻歲月餘、播陽握手感情加

茗溪秋色同吟月、墨水水春風共醉

三慈就遙陶令也、八書傳美馬遷家

相逢喜即相離恨、何日重迎太史事

重野成斎が姫路に來たので、門

人金井利信と小谷長父を伴い面会を行った。その時書いてもらつた書が金井、小谷両家に残っている。

穢句寄之芝蘭室、一粲若能附雌黃

彷彿當年共促膝、望嶽街正好環碧

樓可歛空際芙蓉、影亭々落孟天使

斯人居斯樓斯人、知與斯嶽安

明治十九年一月初八日錄于

姫路南海上白濱村寓窓

和其韻以答

辱知 龜山雲平拝稿

てるので紹介する。

三、觀海講堂を訪れた 学友の漢詩

現時東京重野成
齊南摩羽峯等諸子

所批評也先生已見
晤成斎羽峯

雲平の教える觀海講堂が、有名になつてゆくと、曾つて江戸昌平が次々と訪れてきた。

東京望嶽街名曰環碧樓
以小樓容膝安為韻賦短

古五首見寄乃次其韻叙
今昔之感且祝

南摩綱紀、同大学教授岡鹿門、文

部大歎長三洲、学者提靜斎、学者

長梅外、松本圭堂らである。彼らもまた漢詩を寄せている。

一別殆州歲世運、治與擾白雲千里
隔無復傳信鳥近、時東西音耗通依

然丈墨棄不小君、詩說五苑讀之涕

泗流我亦遭國難、今與鹿豕游獨有

丈綠未斷絕挾絰、時上講書樓同賞

墨提共撫台麓松、曾游恍入夢何日

重相從想見東都、花木與吾同改昔

時容芳吟和久如、何日月疾纔緩無

相逢喜即相離恨、何日重迎太史事

重野成斎が姫路に來たので、門

農村行盡又漁村、去却相生原上門
弄幹墨末間有趣、聞弦誦外寂無喧

責松落映鳥凡白、浪湧天搖酒樽最
喜主人能駐客使、予半日滌襟煥

この作者岡崎眞鶴は旧土佐の人
で、明治初年姫路で国立第三十八

銀行を設立した。後神戸銀行とな
り、会長岡崎忠の祖父にあたる。

三十多年前東京
入茗校茗校者在茗
渓上也時所得詩文
數卷將上梓右詩文

姫路逢龜山節宇先生々々有詩
和其韻以答

成斎拝

神交舟載路程賒、握手樽前樂意加
重逢勿患從今後、水有輪船陸有車

十六年發末十月十有八日寄懷

已丑四月一日
惺齋先生於姫路

其三
先生於其旅館處書
大政
一自相分三十年間來
浪海島又無田因急為外
秋風月聯游墨悵春
樹烟青眼黑能浴
舊游白以老未脫草
參陶然取醉芳樽下
譚至滿游昧益前

節宇龜山先生
辱知生梅外長允丈

春去秋來幾送迎、空餘頭上雪千茎

尺書往復相思意、五歲風烟各地情
白鷺飛邊懷舊社、青松深處夢先生

最欽篤實眞君子、曠世伊人欲結盟

候第一何卒御同様長寿御交誼樂居申

昨年ヨリ松平棟山君文抄評ノ嘱
有之小子ハ多忙無寸暇ヲ以テ断申

候處是非トノフニ付不得己承諾過
半妄評致候美ニ精鍊之文有之感服

また、東京大学教授南摩綱紀が、
雲平宛に書簡を送っているので併せて紹介しておく。

四、南摩綱紀の書簡

序文ハ三島氏出来申候依テ跋文
ニテモ相加度別紙起草着見候處拙

劣ハ申迄無之事実ノ間違等ハ有之
間敷哉闇斎学ノ件并槍術ノ件ハ慥

ニ承候覚御座候處如何ニ候得ベキ
ヤ、甚御手數恐惶ニ候得ドモ、右

ノ一件并文字トモ十分御叱正被下
度奉懇願候

去ル廿七日ノ貴翰相達拜唔之心
地ニテ雪手拜読仕候。

ヨシ奉拝賀候
先般ハ御地方非常洪水慘然ヲ極

候ヨシノ處御住宅還別ニ御損害不
被為在千万奉遙賀候

小生古稀ニ至候ニ付拙作郵呈仕
候處御高質被下且速ニ尊知ヲ賜り

不相替御懇志之段不知所謝奉感佩
候篇々精鍊巧麗感服仕候乍去餘り

同窓四散各天涯、高臥欽君不出家
過褒不敢當汗顏之至ニ御座候

重贈節宇君

靜齊生提勝

幽窓交臂恩今昔、話盡燭光盃影前

試把幽姿為月旦、百花壇上一梅花

高意ニ隨ヒニ妄言書加返上仕
候、御笑舎被下度何卒御揮毫拜領

仕度幾重ニモ奉拝願候
先生ハ己ニ昨年古稀ニ被為至候

由此度之尊書ニテ始テ承知実ハ小

生ヨリ三四年モ御低齡ノ様ニノミ
心得居候雲平先生至極御壯健ニ被

為入誠ニ目出度人間百福中以寿為

第一何卒御同様長寿御交誼樂居申

候

昨年ヨリ松平棟山君文抄評ノ嘱
有之小子ハ多忙無寸暇ヲ以テ断申

候處是非トノフニ付不得己承諾過

半妄評致候美ニ精鍊之文有之感服

致候事ニ御座候

辞世

柴の露とともに

消えゆく夕べかな

祖父龜山源五右衛門成将は、大

阪留守居番役祿高百八十石で大阪

に住した。そして大阪崎門学脈

二承候覚御座候處如何ニ候得ベキ
ヤ、甚御手數恐惶ニ候得ドモ、右

ノ一件并文字トモ十分御叱正被下

（山崎闇斎学）の儒者「御牧申藏

直齊」に就いて学んだ。根岸混處、

ノ二件并文字トモ十分御叱正被下

近藤顧一郎（いづれも好古堂教授）

は同門であり、玉田默翁門下では、

股野玉川（竜野藩儒者）合田麗澤

（好古堂教授）河合寸翁（家老）

などがあり、共に崎門朱子学の儒

者たちである。

父龜山源五右衛門百之は、崎門

朱子学の村田常昌に学んだ。

朱子学も代々崎門朱子学の儒者

杏雨詩稿 伊藤伊太郎

姫路響洋社

小子共スラ驚居候事故如何斗歎御
驚怪ニ候半是非御一遊待上候
書餘後音ニ相讓申候時下折角為

國家御自愛祈居候

ことはなかつた。まさに恵まれた
教育環境の中に育つていつた。

響を充分に受けついだ。曾祖父よ
り父源五右衛門百之に至まで、代々

多数の書物があり、読書に事欠く

十六年發末十月十有八日寄懷

高意ニ隨ヒニ妄言書加返上仕
候、御笑舎被下度何卒御揮毫拜領

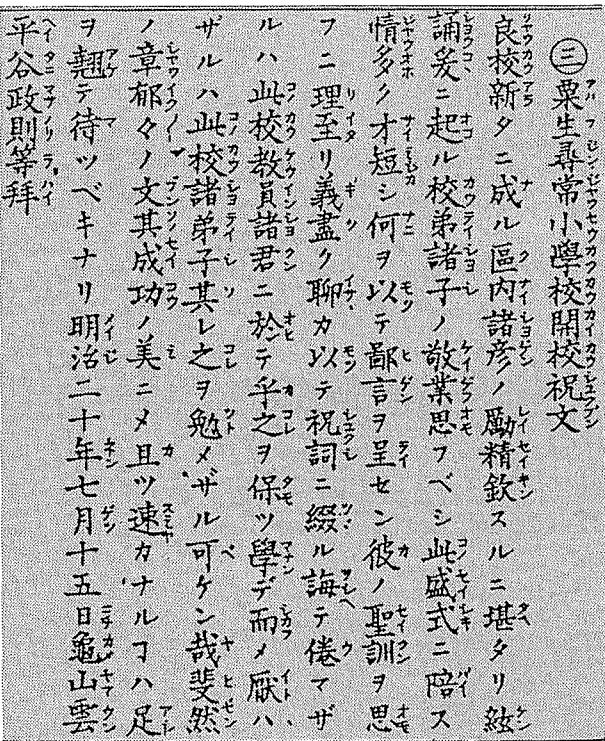
江戸昌平饗では当時日本には他に
ないといわれた。皇清經解千数百
部をマスターしたといわれ、名実
共に大儒学者となつていつた。時

代が変わり、松原村に觀海講堂を
創立して、名実共に大教育者とし
て、名声を博してゆくと江戸時代
の学友達や、旧藩の学友達が訪れ
講義をしたり、詩文の会を開いて
競作をした。

栗生小学校開校の祝文

島田 清

例軌範下巻の十八丁表に、右の祝文が出ている。全文を左上に掲げる。



栗生小学校開校の祝文

龜山雲平が松原神社の祠官となつて、社傍に居を構えて以来、地域の人びとの接触、交渉は、日とともに深くなつた。文化、教養に対する志向を、このころ、特に強めていた灘地方の人たちにとって、頑学、雲平を近くに迎えたことは、魚が水を得た喜びに似ていたであろうと思う。「観海講堂」の設立は、そのうちの最も大きなできだ

とであるが、それ以外にも、いろいろなことで雲平に相談し、教えを乞い、また、依頼していたにちがいない。ここに掲げる栗生小学校開校の祝文も、その一にかぞえられるものである。

二、

明治二十一年、雲平が編纂し、翌二十二年一月四日、大阪の浜本明昇堂から出版した「記事論説作

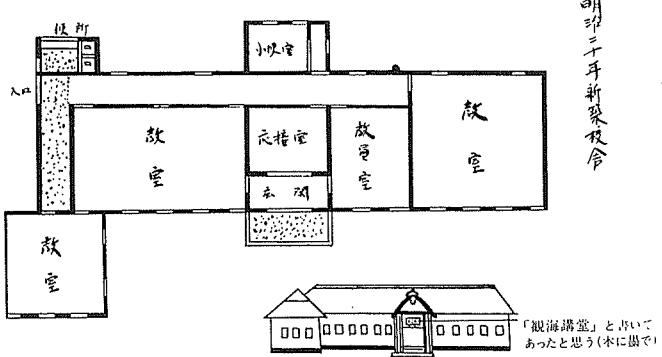
仮名も施してあるので、読みくだすのに苦労はない。しかし、用語がむつかしく、容易になじめないのは、前回紹介した「観海講堂開業式祝文」と同じだ。漢字を制限し、平易なことばを使うように奨励する現代と、むつかしい漢字、漢文に挑戦し、そのむつかしさを克服しようとした百年前（明治二十年ごろ）との相違である。前回の例に倣い、むつかしそうな文字を拾い出して解説しておこう。

郁々^{いくいく}一次の三つの場合の形容に使われる。

- 1、文物の盛んな貌
- 2、あやのある貌
- 3、香氣のある貌

足^{あし}を翹^あげて一足をつまだたせて立つこと。すなわち、「まつ」という意。（翹望に関連する）

それでは、開校の式典に参列した雲平が、どのような感想を抱き、どんな祝辞を述べたか、左に、わかりやすいことばで記してみよう。



とばである。したがつて、斐然は、「あやがあることば」「ことば」ことになる。

明治時代愛唱歌
龜山茂理校長作詞
松は緑に砂白く
景色^{くわい}の里に
人は優れし先生が
住^すせられし鄉^うにして
今も暮^くね者^{ひと}はなし。

りっぱな学校が、新しくできた。これは、学区内の人達が努力し、骨を折られた結果で、私は、心より、およろこび申しあげたい。と同時に、この盛大な式典にお呼びいただき、列席することができたことをこのうえなく、うれしく思っている。こうしたとき、後者の意味である。（こ^こでは、いうまでもない。）斐然^{ひぜん}斐^斐は、あやがあつて美しいことをあらわすこ

ザルハ此校諸弟子其レ之ヲ勉メザル可ケン哉斐然ノ章郁々文其成功ノ美ニメ且ツ速カナルヲハ足ヲ翹テ待ツベキナリ明治二十年七月十五日龜山雲平谷政則等拜

節字遺稿

卷下 詩

(第一回分)

田中倫橋

2、蠶婦詞
蚕婦の詞

東阡南陌總條桑

東阡
南陌
總條の桑

養蚕の時節

養蠶時節太勿忙。

太勿忙なり。

吾髮不梳吾粉落、
吾粉落つ吾が髮梳らず
吾が粉落つ

東や南の大道もみな葉をつけた桑枝ばかり、養蚕の時節にはたいへんないそがしさ。

髪もとかず白粉も落ちるまで働き、ただ繭の箔が増えるのを願うばかり。

語訳

(1) 東阡南陌 阡も陌も大きな道をいう。

(2) 雪團 普通は“てまり”をいう。すなわち、すいかずら科に属する

金の繭ひき湯が白煙をたて、くり糸車の前で絹糸をぬき出す。男の子はやっと五才で娘はまだ二才、むづきかけにだっこま

で手がかかる。

景物勿々欲斷魂。

景物 勿々

魂を断たんと

欲す。

薄舉一杯壽阿爺。薄く一杯を挙げて阿爺を寿がん。

からむし作りに老ゆるとも恨むまい。

さあ蚕祭も終わってお金が残るなら、一杯の祝酒を父さんにささげて、永生きをたたえましょう。

綠樹連煙城北寺、
綠樹 煙に連なる
城北の寺、紫藤垂雨水東家。
紫藤 あめに垂れる水東の家。

家園の白髮の

人恙無く、

客舍の青灯の

夢痕有り。

志業悠々歸尚未、
志業悠々帰ること尚お未

だし、

且將一醉送黄昏。且つ一醉も

黃昏を送らん。

景物勿々欲斷魂。

景物 勿々

魂を断たんと

欲す。

故郷の白髮の親たちは無事で

あり、私は宿舎の青灯のもとで

夢を結ぶ。

朝まだき夢からさめて縁がわるを。
朝まだき夢からさめて縁がわるを。
朝まだき夢からさめて縁がわるを。

玄黄只合獻公家、
玄黄只合獻公家、
玄黄只合獻公家、

織物はひとえにお上に献納しなければならぬ。わたしの身は

それを指すのではなく、白い繭をいうのである。

しかし、ここではそれを指すのではなく、白い繭をいうのである。

氣をひきしめて笈を負うて都にいる、まわりの景物はあわただしく変わり私の魂をゆり動かす。

もやのなかにつづく綠樹の多い城の北のお寺や、雨のなかに紫色の藤の花がたれさがる川の東の家。

節字遺稿 下
龜山雲平著
晚翠軒藏梓

(5) 薄 しばらくと読む。
芋は麻の一種。

かくむし。
芋は麻の一種。

もやのなかにつづく綠樹の多い城の北のお寺や、雨のなかに紫色の藤の花がたれさがる川の東の家。

3、旅懷 旅懷
七言律詩(下平声・元韻)
蕭然負笈在都門、蕭然笈を負

いて都門に在ります
いて都門に在ります
いて都門に在ります

故郷の白髮の親たちは無事で

あり、私は宿舎の青灯のもとで

夢を結ぶ。

故郷の白髮の親たちは無事で

あり、私は宿舎の青灯のもとで
夢を結ぶ。

勉学の志は前途はるかで故郷にはなかなか帰れない。まあ一醉の酒を飲んで夕方を過ごそう。

語訳

- (1)、そぞう勿々あわただしく。
(2)、よほせん蕭然氣をひきしめるさま。

『節字遺稿』巻下の詩を訳してみたので、わずかに初めの三首だけが感想を述べてみたい。

第一詩の「花枝動かんと欲して春寒なるを賦し得たり。」は、いわゆる七言絶句で、花の芽が漸くふくらもうとしているのに、春寒が襲来して、気のもめるようすを詠じている。時期でいえば、一月下旬から二月中旬までの間の、春陽が輝き鶯が鳴き始めるころである。

この詩は、転・結句が特によい。

漸く梅の花が咲こうとするころに、「東風無頼」の甚だしく、花を催す細雨が却つて春寒を生ずるを恨む」というところに、冬から春へなかなか季節が進行しないという季節の切点の微妙なお天気で、氣のもめるさまをうまく表現している。

葛西確齋氏が「清麗」と、この詩を批評しているが、それは恐らく「鶯声」「東風」「催花細雨」等の用語を見て、春のすがすがしい美麗な詩であると評したのである。しかし、作者の意図はそんなところではない。評者は詩の表面だけをよんでも評してはならない見本である。

さて、『遺芳纂錄』中の履歴書によると、嘉永三年十二月二十四日江戸昌平坂学問所寄宿仰付ラレ、四年正月十八日御儒者佐藤捨藏様へ入門、書生寮へ入ル」と記されている。第一詩の題下に「嘉永四年」と注記されているのを、併考すると、ちょうどこの頃の作詩かと想像される。

第二詩の「蚕婦の詞」は、典型的な七言古詩で、四句三章から成る。

最初の四句は、蚕が繭を結ぶまでの養蚕をうたっている。そのなかで、第三・四句に、多忙なときは髪も梳すらずお白粉も落としたまま、ひたすら繭の箔が大きくなるのを願っている。第五句から第八句までの第二章では、繭をつむぐ作業である。第七・八句に、男の子がやっと五才、下の女の子が

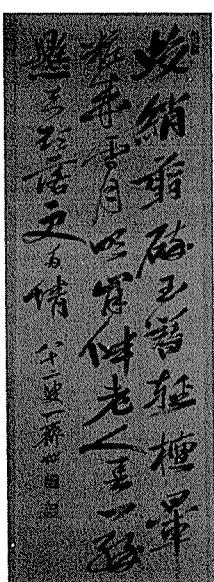
やっと二才、繭をつむぐ合間に、子どものむつきかけからむずかるのをだっこするという育児の忙しさをうたっている。終わりの第三章は、第九句から第十一句までで、四句が入声、第七・八句が去声、第十一・十二句は去声と下平声六麻である。鮮やかな構成である。

第三詩の「旅懷」は、江戸での遊学をうたつて余すところがない。

酒の一杯を献上して、忙しい間をよく手伝ってくれたお礼と、父さんの長寿を祝うという美話で結ばれている。

納したので、年よったお父さんに

お未だし」という学業の前途がはるかなことを思いつつ、「且つ一醉して黄昏を送らん」の「一醉」に総べて忘れるしぐさには、若い学徒のセンチメンタルといおじさやさを感じられる好詩である。



雲平顯彰会藏

佐藤一斎の書

闊達の一語につきる。

右肩を上げグイグイ書き進む書

である。恐らく中国明時代の混乱

今回は龜山雲平の師にあたる一

斎の書を取り上

げてみた。渡辺

華山の有名な一

斎の肖像画があ

るが、眼光する

どく一斎の人となりがわかる気が

する。さて、書幅であるが、豪快・

れをうまく古詩にまとめあげ、並々でない詩的手腕を發揮している。

各章の終末一句の押韻は、第二・

つぎに、第五・六句の対句は、

最上の組み立てに仕上げてある。

家園に対し客舍」、「白髮に

對して青燈」、「人無恙に対し夢

有痕」と対応させて、一点の非も

ない。

尾聯の「志業悠悠 帰ること尚

お未だし」という学業の前途がはるかなことを思いつつ、「且つ一

醉して黄昏を送らん」の「一醉」

に総べて忘れるしぐさには、若

い学徒のセンチメンタルといおじ

しさやさを感じられる好詩である。

総じていえば、三詩とも立派な

詩で、大いに称讃すべきである。

の書に影響されたと思われる。

一斎の書の中で行草作品は感興の

赴くまゝに一字一字の大小や姿態

を変化させ、それによって逆に全

体を統一し、潤滑を利用して書の

表現の大切な要素である時間性を

強調して深味のある作品がある。

尚、この漢詩は、雲平が昌平醫

を卒業する年の書である。

黄道周・倪元璽・王鐸・傅山とう

池田善彦

亀山雲平考（一）

雲平とその時代

石塚太喜三

播磨聖人と呼ばれ、姫路藩政や播磨の教育に大きな足跡を残した亀山雲平は、文政五年（一八二三）姫路藩士龜山百之の次男として姫路に生まれ、明治三十一年（一八九九）に白浜村の観海講堂にて没している。

雲平の生きた幕末から明治にかけての七十八年間は、徳川幕府がたおされ、薩摩・長州藩を中心とする明治政府に政権が移ったというだけではない。封建社会から近代社会への過渡期であり、政治・経済・文化などあらゆるものが、歐米の近代文明の前に圧倒され、これまで永い伝統のなかで培つてきた日本の価値観が目に見えて崩壊し変容していく激動の時代であつた。

雲平は、このような激動の波を外から眺めていたのではない。そのまつただ中で、地に踏張り必死に生きた人でもある。

雲平は若くして昌平坂学問所に学び、姫路藩の好古堂の教授を務

める教育者であり、同時に、藩政の諸務を監督し諸士の怠慢や藩中の士風をたたず大目付（大監察）

や明治元年、景福寺山に陣取る備前兵を前にして、窮地に立たされた姫路藩の命運を担う備前軍使応接役を命じられるほどの実務的政

治手腕をも兼ね備えた人物であった。

雲平の年譜で特に目を引くのは、昌平坂学問所への留学や江戸在番などを含め激動期の江戸で生活した期間が長いことである。その間に、鎖国と開国に國論を二分したペリーの浦賀来航、井伊直弼によつて吉田松陰、橋本左内、頼三樹三郎ら八名が処刑される尊皇攘夷運動に対する大弾圧であった安政の大獄や水戸・薩摩藩の尊皇派の浪士によって井伊直弼が暗殺されるという桜田門外の変など大事件を

身近に見聞し、当時の日本の國論を一分していた佐幕、特に尊皇派

に対する雲平はどのような考え方をもつていたのであらうか。

元治元年（一八六四）、姫路藩

でも尊皇派に対して弾圧を加えるという甲子の獄がおこり、家老の高須隼人によって尊皇派と目される者が次々と逮捕された。同年十

一月二十六日には判決が下り、河合伝十郎、江坂栄次郎、河合惣兵

衛、萩原虎六、江坂元之助、松下

自殺及び死罪、近藤啓蔵、武井寅

鉄馬、市川豊三、伊舟城源一郎は

三、永田弥四郎、西村一太郎、山

口太藤太には永牢、その他罷免、

閉門、蟄居など厳しい処分が行われた。この甲子の獄に雲平も大目

付として深く関わっている。その

時の雲平の態度は、『遺芳纂録』

などを含め激動期の江戸で生活した期間が長いことである。その間

に、鎖国と開国に國論を二分した

ペリーの浦賀来航、井伊直弼によつて吉田松陰、橋本左内、頼三樹三

郎ら八名が処刑される尊皇攘夷運動に対する大弾圧であった安政の大獄や水戸・薩摩藩の尊皇派の浪

士によって井伊直弼が暗殺される

という桜田門外の変など大事件を

身近に見聞し、当時の日本の國論を一分していた佐幕、特に尊皇派

に対する雲平はどのような考え方をもつていたのであらうか。

雲平は、大目付としてその場の厳しい雰囲気や感情に流されて安易に妥協することなく冷静に事の顛末を見きわめて公正に判断を下す。また、炭本総太郎の追憶によれば、雲平は常に「主ヲ持ツモノ」其勤王ヲ唱フル先ヅ其主ヲ助ケテ勤王ヲナサシム之レ真ノ勤王ナリ」というのが持論であったという。

雲平は、佐幕、尊皇と國論が二分される中につけて、佐幕派に目

一月二十六日には判決が下り、河合伝十郎、江坂栄次郎、河合惣兵

衛、萩原虎六、江坂元之助、松下

自殺及び死罪、近藤啓蔵、武井寅

鉄馬、市川豊三、伊舟城源一郎は

三、永田弥四郎、西村一太郎、山

口太藤太には永牢、その他罷免、

閉門、蟄居など厳しい処分が行われた。この甲子の獄に雲平も大目

付として深く関わっている。その

時の雲平の態度は、『遺芳纂録』

などを含め激動期の江戸で生活した期間が長いことである。その間

に、鎖国と開国に國論を二分した

ペリーの浦賀来航、井伊直弼によつて吉田松陰、橋本左内、頼三樹三

郎ら八名が処刑される尊皇攘夷運動に対する大弾圧であった安政の大獄や水戸・薩摩藩の尊皇派の浪

士によって井伊直弼が暗殺される

という桜田門外の変など大事件を

されながらも甲子の獄の時の態度や炭本総太郎の追憶に見られるように尊皇派にも理解をもちながらも時流に流されることなく、常に

姫路藩の動静や主君に対する忠誠を気づかいながら、その中で自分

の職責を堅実にはたそうとする誠実な実務型の人であった。

節宇逸話（四）

はなち、他日の勉学（＝緊張＝）張）の基としたのである。

今日は地元白浜の岡田重成の逸話を紹介する。

先生嘗て發会式ノ祝詞ニ一張

弛ハ文武ノ道也ト夫レ弛フ所有ラズンバ何ゾ張ル所有ルヲ得ン然ラ

ズンバ則今日ノ弛ヘテ樂ムハ即チ他日ノ張チ勉ムル所以ナリ云々ト故ニ

決しようという厳しい雰囲気の中で次のように主張したという。

先生正ヲ守リテ動カズ罪ノ輕重ヲ

論セズシテ刑ニ處スルハ妥當ナラズ況シテ親シク手ヲ下サザリシモノモ齊シク死刑ニ處スルハ如何ト

テ譽々諤々トシテ論争セラレタレバ有司モ遂ニ其言ニ伏シタリ

ノモ齊シク死刑ニ處スルハ如何ト

シテ一向浮カズ先生之ヲ勵マシ自ラ起テ舞ハル・高足門生某曰ク先

生踊ル吾何ゾ踊ラザルヲ得ントヤ

シテ向浮カズ先生之ヲ勵マシ自ラ起テ舞ハル・高足門生某曰ク先

白浜小学校の首席訓導であった現九州大学名誉教授文学博士、岡田武彦先生の父君である。武彦先生は来年五月、四十日間に亘り

中国の王陽明先生の遺蹟探訪旅行に出る（第四回）。日中友好の一環として、中国の学者と共同調査に

当る予定であるとか。先生のご健

康とご成功をお祈りする。